

平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一七―一

平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、ホテル建設に伴う平安宮跡・二条城北遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

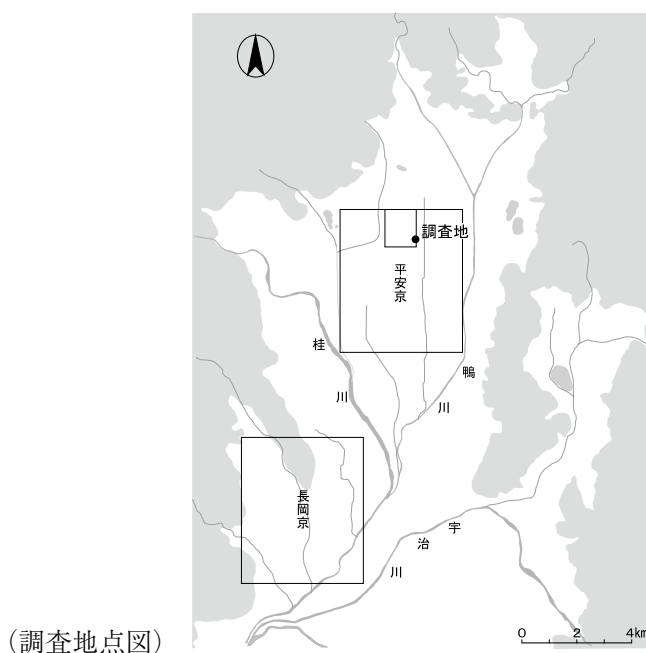
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安宮跡・二条城北遺跡（京都市番号 16 K 439） |
| 2 調査所在地 | 京都市上京区丸太町通黒門東入藁屋町535－2 他 |
| 3 委 託 者 | 株式会社 礎 代表取締役 杉森 実 |
| 4 調査期間 | 2017年3月21日～2017年5月2日 |
| 5 調査面積 | 199.5㎡ |
| 6 調査担当者 | 関広尚世 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 関広尚世 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺 構	4
4. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
(2) 土器類	9
(3) 瓦 類	11
(4) その他の遺物	11
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区南半全景（北から）
		2	調査区北半全景（北から）
図版2	遺物		土器類
図版3	遺物		瓦類・石製品・土製品・金属製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	調査前全景（南東から）	2
図4	作業風景（南から）	2
図5	調査区南壁・西壁・北壁断面図（1：80）	5
図6	調査区平面図（1：150）	6
図7	出土土器実測図（1：4）	10
図8	出土瓦拓影及び実測図（1：4）	11
図9	出土石製品・土製品・金属製品拓影及び実測図（1：2、石1のみ1：4）	12
図10	鉄製海老錠（金1）X線写真	12

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	9

平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯 (図1)

調査地は、京都市上京区丸太町通黒門東入藁屋町に位置する。ここにホテル建設が計画され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「保護課」という）により試掘調査が行われた。その結果、安土桃山時代から江戸時代の遺構とその下層遺構の存在が予測されたため、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて、発掘調査を実施した。

(2) 調査の経過

調査区は、保護課の指導により東西7m、南北28.5mに設定した。面積は、約199.5㎡である。重機の進入路と残土置き場を確保するため、南半部、北半部、北端部での3反転調査となった。

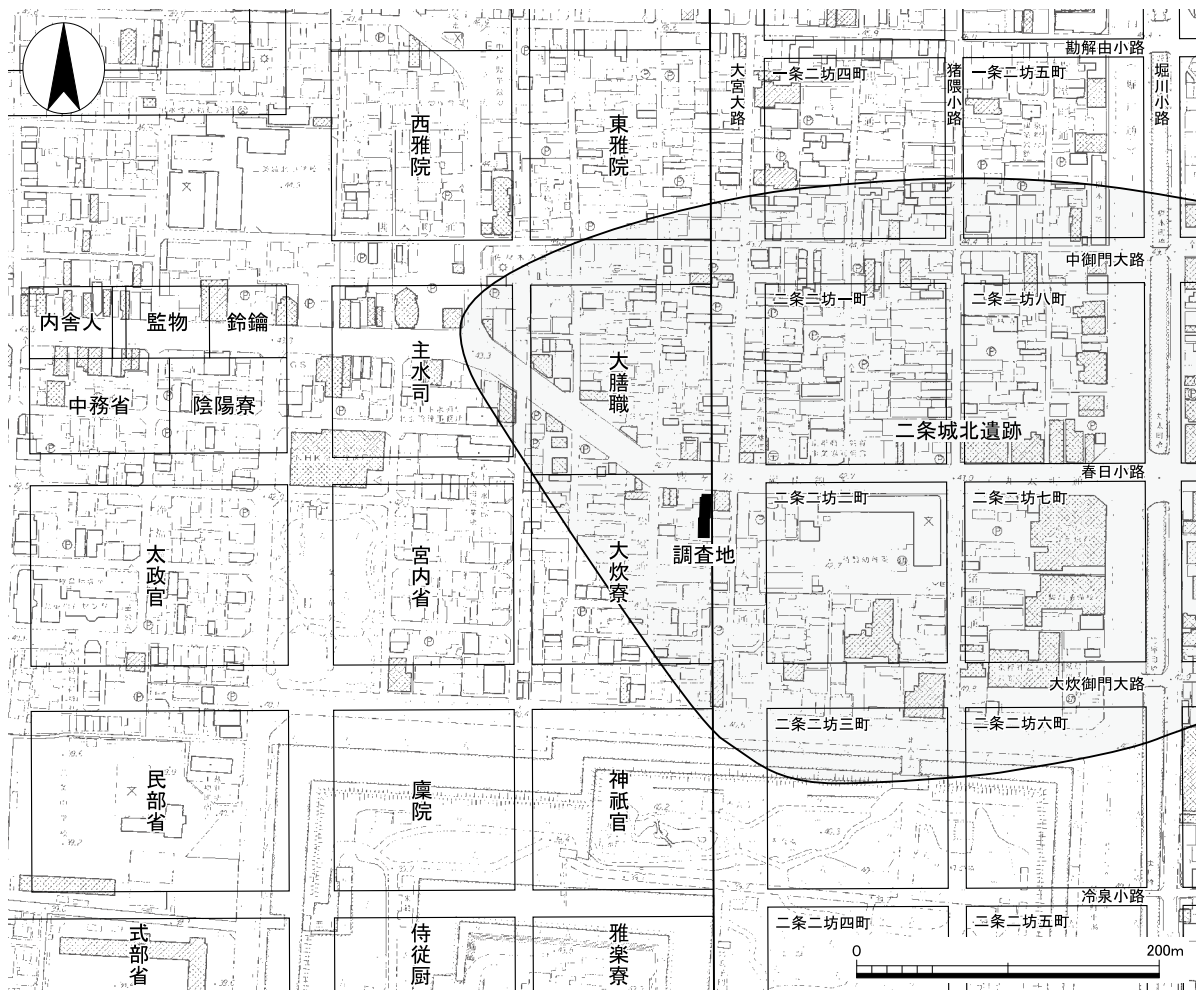


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

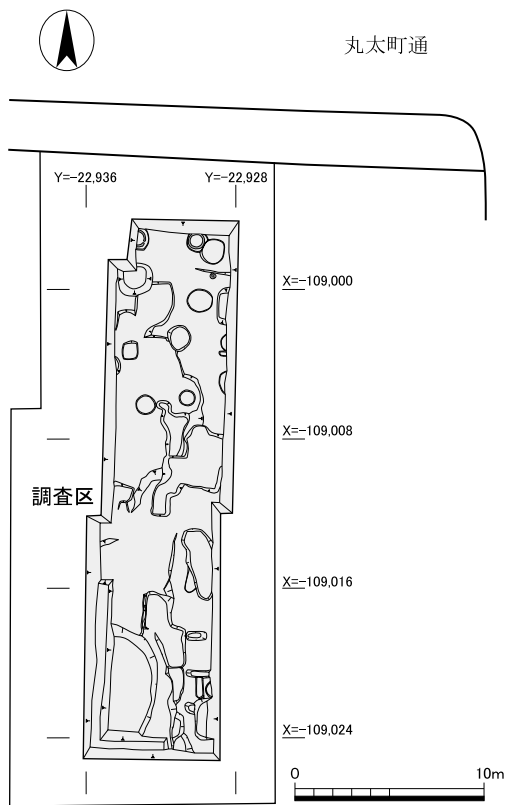


図2 調査区配置図 (1:400)



図3 調査前全景 (南東から)



図4 作業風景 (南から)

調査は2017年3月21日から南半部より開始した。重機を用いて現代盛土を掘削し、遺構面を検出した。調査区南東隅では、土坑状の遺構 (SX1) が確認された。一部を幅1mで断ち割り、下層の確認を行った結果、標高36.58m (現地表面から約5.4m) で地山面を確認した。安全確保のため、SX1は標高39.12mまでの掘削に留め、堆積の確認と遺物の取り上げをした。検出した他の遺構については、人力で掘削を行った。遺構掘削完了後、記録をとって4月10日に埋め戻した。

北半部は4月12日に重機を用いて現代盛土を掘削し、遺構面を検出した。遺構掘削完了後、記録をとり、埋め戻しを行った。

4月27日、北半部を完全に埋め戻す前に、北端部の現代盛土を重機で掘削し、遺構面を検出した。遺構掘削完了後、記録をとり、北半部とともに埋め戻しを行って5月2日に調査を終了した。調査の進行にしたがって適宜、保護課の臨検を受けた。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は京都盆地の北部、船岡山から続く緩い傾斜地の南端にあたり、安定した地盤に位置する。当地周辺には、弥生時代の柱穴・炉・溝が確認された二条城北遺跡がある。その後、平安遷都に伴い、平安宮が造営される。調査地は平安宮大炊寮及び東限推定地にあたる。大炊寮は、諸国から運ばれる春米（精白米）や諸司の食料のことなどを担当した宮内省被管の役所である。また、大炊寮の北西隅には、供御院という畿内の稲を収める区画もあった。

平安宮は何度も火災などにあい、摂関期以降には里内裏が一般的となって荒廃が進み、鎌倉時代にはさらに荒廃が進んだ。しかし、桃山時代になると聚楽第が築かれ、江戸時代には二条城、京都所司代が営まれ、その周辺には町屋が形成されたことが元禄4年（1691）の『所司代御下屋敷境町持家之地尻見分』¹⁾ 絵図から明らかになっている。

(2) 既往の調査

平安宮東限推定地の発掘調査は1973年に行われている²⁾。調査地は二条城の北側で、平安宮の神祇官東辺推定地であった。調査の結果、平安時代後期に廃絶したとみられる幅3.5m、深さ1.2mの南北方向の溝が検出され、平安宮東限の隍（ほり）であることが判明した。隍底面の標高は約38.4mである。さらに1976年には、保護課が今回の調査地東隣で調査を行っている³⁾。これは1973年調査区の北、150mの地点にあたる。この調査では、基底部の幅2.1m、隍底面の標高約41.31mの溝が検出され、大宮大路の西側溝（平安宮東限の隍）であることが判明した。

註

- 1) 大上直樹・高橋みずほ・谷直樹「中井家絵図より見た京都所司代の上屋敷、中屋敷、下屋敷の建築について」『大阪市立大学生活科学部紀要』第49巻 17-31 2001年
- 2) 浪貝 毅「平安宮跡東限推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1976-I』京都市文化観光局文化財保護課 1977年
- 3) 浪貝 毅・玉村登志夫「平安宮東・南限の発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1973-I』京都市文化観光局文化財保護課 1974年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5、表1)

基本層序は、現代の整地盛土層 (第1層、厚さ0.8~1.0m)、この下層に炭化物がわずかに混じる暗褐色微砂土 (第22層、厚さ約0.35m)、礫が多量に混じる黒褐色微砂土 (第23層、厚さ0.1~0.7m)、地山土と炭化物の混じる黒褐色微砂土層 (第24層、厚さ0.3~0.7m) が堆積する。第22~24層はすべて近世の整地土であった。その下層は、褐色細砂土 (第30層) の地山となる。

(2) 遺 構 (図6、図版1・2)

検出した遺構は、近世前半と後半のものに大別できる。

近世前半では、井戸 (SE25・26・33)、土坑 (SK9・11・14・17・30・38) を確認した。土坑 (SK9・11・14) は切り合い関係などから近世後半以前のものと考えられる。

近世後半では、井戸 (SE18・24・34・35・37)、土取り穴 (SK2・3・6・10・12・20・23・28)、土坑 (SK29・31・32)、用途不明遺構 (SX1) を確認した。SX1は近世後半の土坑状遺構と考えられる。

各遺構の詳細は下記のとおりである。

近世前半

SE25 調査区北半部で検出した。直径1.05mで、標高は40mまで掘削した。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

SE26 調査区北半部で検出した。直径1.35mで、標高は40.21mまで掘削した。遺物は土師器・焼締陶器・陶器・瓦が出土した。

SE33 調査区北半部で検出した。直径0.85mで、標高は40.14mまで掘削した。遺物は土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SK9 調査区南半部で検出した溝状土坑である。東西1.6m以上、南北0.35m以上で、底部の標高は40.29mである。遺物は土師器と瓦が出土した。

SK11 調査区南半部で検出した。東西0.5m以上、南北0.55mで、底部の標高は40.3mである。遺物は出土していない。

SK14 調査区南半部で検出した溝状土坑である。東西1.1m、南北0.5mで、底部の標高は40.2

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
近世前半	井戸 (SE25・26・33)、 土坑 (SK9・11・14・17・30・38)	
近世後半	井戸 (SE18・24・34・35・37)、 土取り穴 (SK2・3・6・10・12・20・23・28)、 土坑 (SK29・31・32)、用途不明遺構 (SX1)	

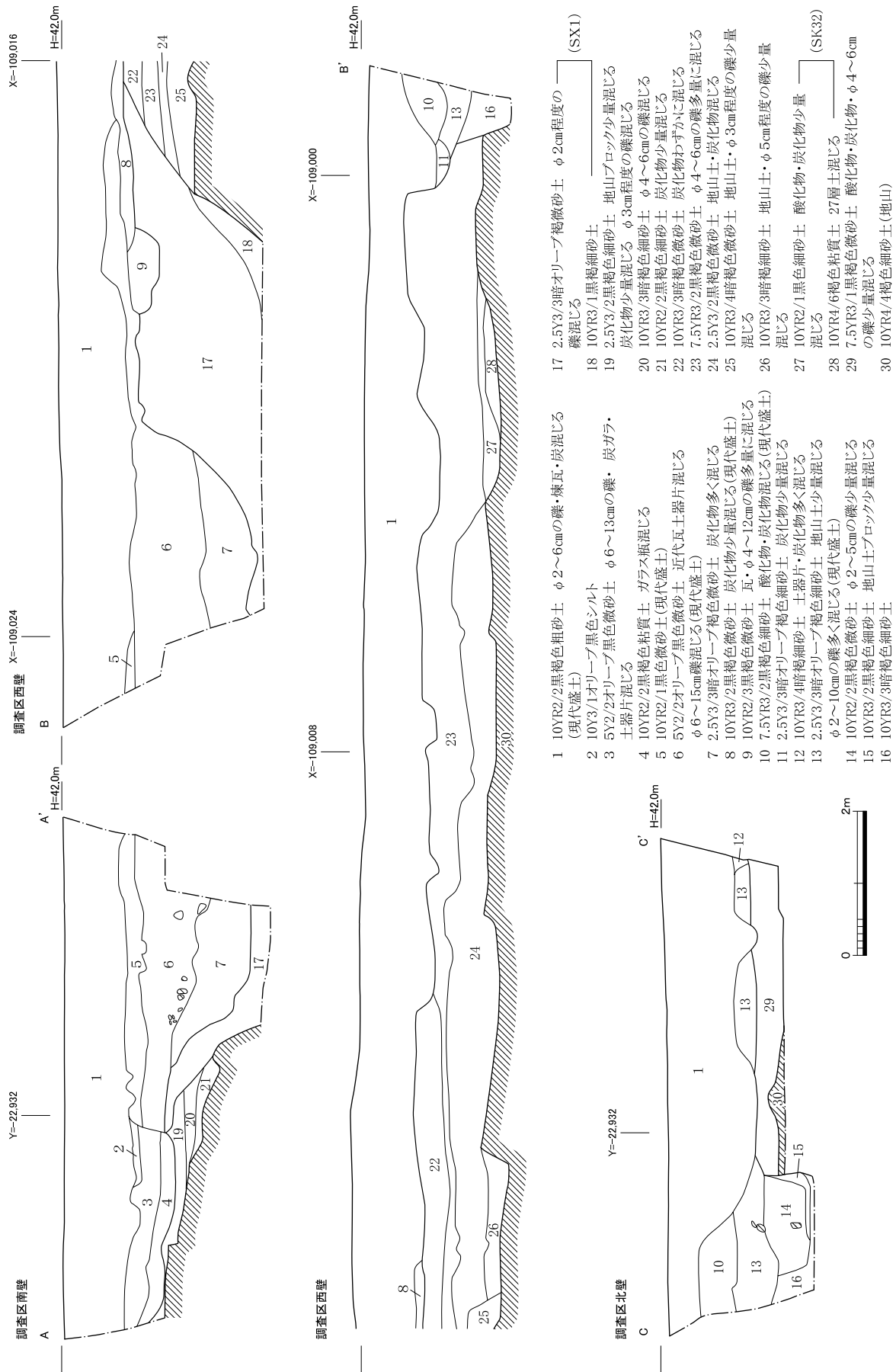


図5 調査区南壁・西壁・北壁断面図 (1:80)

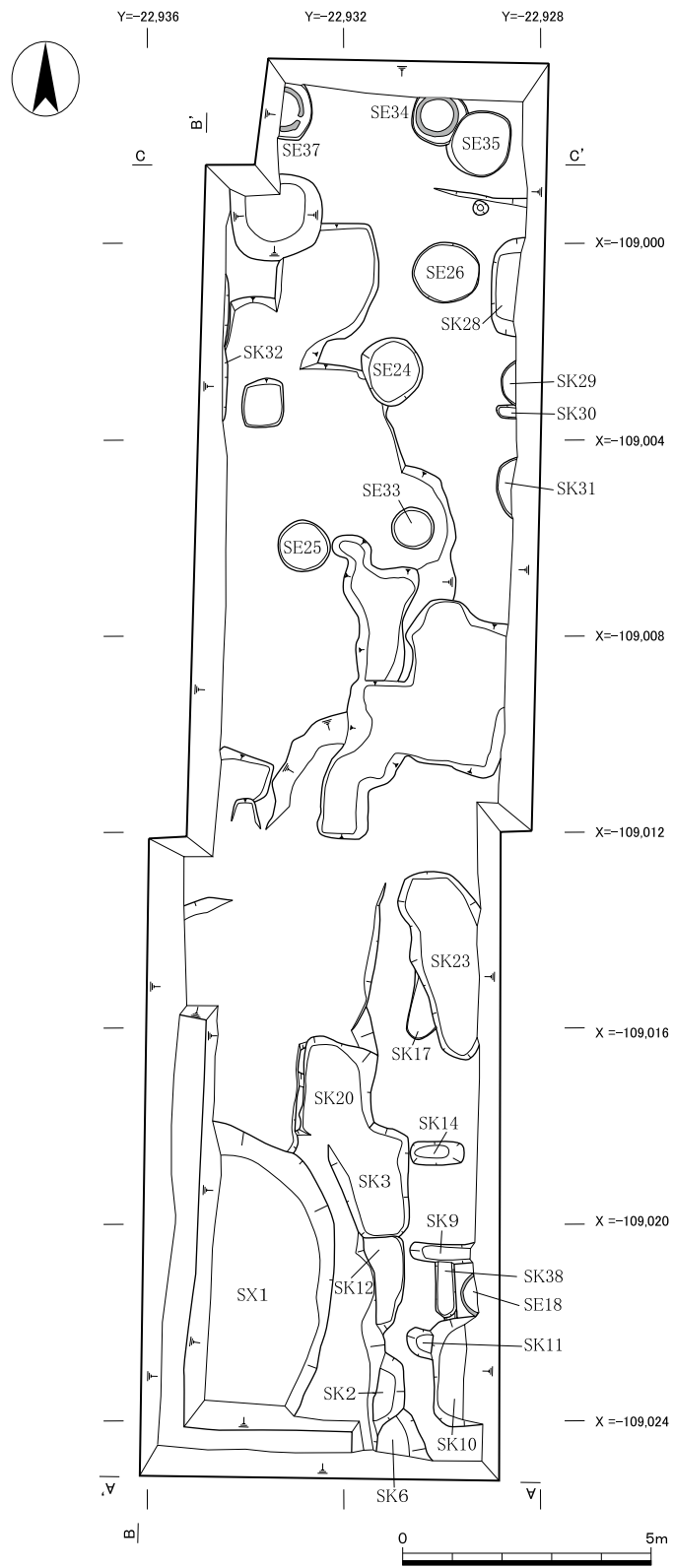


図6 調査区平面図 (1 : 150)

mである。遺物は土師器が出土した。SK9・11・14は、ともに布掘り状を呈し、同じ性格の遺構である可能性が高い。

SK17 調査区南半部で検出した。東西0.6m以上、南北1.3m以上で、底部の標高は40.62mである。遺物は須恵器と陶磁器が出土した。

SK30 調査区北半部で検出した。東西0.4m以上、南北0.3mで、底部の標高は40.52mである。遺物は出土していない。

SK38 調査区南半部で検出した。東西0.4m以上、南北1.15m以上で、底部の標高は40.17mである。遺物は土師器・陶磁器・瓦が出土した。

近世後半

SE18 調査区南半部で検出した漆喰井戸である。直径0.9mで、標高は40.46mまで掘削した。遺物は出土していない。

SE24 調査区北半部で検出した。直径1.4mで、標高は40.29mまで掘削した。遺物は土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SE34 調査区北端部で検出した漆喰井戸である。直径1.15mで、標高は41.48mまで掘削した。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

SE35 調査区北端部で検出した。直径1.4mで、標高は40.92mまで掘削した。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

SE37 調査区北端部で検出した漆喰井戸である。直径1.15m以上で、標高は41.47mまで掘削した。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

SK2 調査区南端で検出した土取り穴である。東西0.6m以上、南北1.7m以上で、底部の標高は40.23mである。遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SK3 調査区南半部で検出した土取り穴である。東西1.65m以上、南北2.25m以上で、底部の標高は40.07mである。遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SK6 調査区南端部で検出した土取り穴である。東西0.9m以上、南北1.2m以上で、底部の標高は40.27mである。遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SK10 調査区南東隅で検出した土取り穴である。東西0.6m以上、南北2.2m以上で、底部の標高は39.6mである。遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SK12 調査区南半部で検出した土取り穴である。東西0.8m以上、南北2.0m以上で、底部の標高は40.31mである。遺物は出土していない。

SK20 調査区南半部で検出した土取り穴である。東西1.5m、南北2.0m以上で、底部の標高は40.02mである。遺物は出土していない。

SK23 調査区南半部で検出した土取り穴である。東西1.5m以上、南北1.8m以上で、底部の標高は40.16mである。遺物は陶器・瓦が出土した。

SK28 調査区北半部で検出した土取り穴である。東西0.6m以上、南北2.0mで、底部の標高は39.87mである。遺物は土師器・陶磁器が出土した。

SK29 調査区北半部で検出した。東西0.3m以上、南北0.9m以上で、底部の標高は41.13mである。遺物は土師器・陶磁器・瓦が出土した。

SK31 調査区北半部で検出した。東西0.3m以上、南北1.2m以上で、底部の標高は40.94mである。遺物は陶器・瓦が出土した。

SK32 調査区北半部西端で検出した。東西0.1m以上、南北13.0m以上で、底部の標高は40.0mである。遺物は陶磁器と瓦が出土した。

SX1 調査区南西隅で検出した。東西2.8m以上、南北5.7m以上である。標高39.12mで掘削を留めた。遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦が出土した。深度が現地表面から5.4mと深く、人力掘削が不可能であったため、重機で地山面のみを確認した。最深部の標高は36.58mである。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱で8箱出土した。内訳は、土器・陶磁器類が7箱、瓦類・石製品・土製品・金属製品が1箱である。近世の遺物が圧倒的に多く、混入とみられる平安時代から中世にかけての土師器が少量混じる。なお、土製品は泥面子、石製品は硯、金属製品は銭貨と錠前である。

平安時代から中世にかけての遺物は、土師器小片と軒平瓦が近世の遺構から出土した。これは混入とみられる。近世前半の遺物には土師器・施釉陶器・焼塩壺・瓦・石製品など、近世後半の遺物には土師器・施釉陶器・焼締陶器・泥面子・銭貨・錠前などがある。

(2) 土器類 (図7、図版2)

土器類は、土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・染付磁器・焼塩壺が出土した。図化したものは次の18点である。

SE33出土土器(1・2) 1は土師器皿Sである。復元口径は9.4cm、器高2.0cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で雲母を少量含む。色調はにぶい橙色7.5YR7/3を呈する。

2は瀬戸・美濃系施釉陶器の段皿である。復元口径は11.0cm、器高は2.1cmである。焼成は良好で、胎土は密である。色調は灰白色5Y7/1を呈する。

時期はいずれも近世前半である。

SE25出土土器(3・4) 3は瀬戸・美濃系施釉陶器の天目茶椀である。復元口径は10.3cm、器高7.3cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は灰白色2.5Y8/2を呈する。

4は土師器炮烙鍋である。復元口径31.2cm、残存高4.7cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、石英を少量含む。色調は外面が灰黄褐色10YR5/2、内面が10YR8/2を呈する。

時期はいずれも近世前半である。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～中世	土師器、瓦		瓦1点		
近世前半	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、染付磁器、焼塩壺、瓦、石製品		土師器2点、施釉陶器4点、焼塩壺1点、瓦3点、石製品1点		
近世後半	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、染付磁器、瓦、土製品、銭貨、金属製品		土師器8点、施釉陶器2点、焼締陶器1点、土製品2点、銭貨1点、金属製品1点		
合計		10箱	27点(2箱)	0箱	8箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

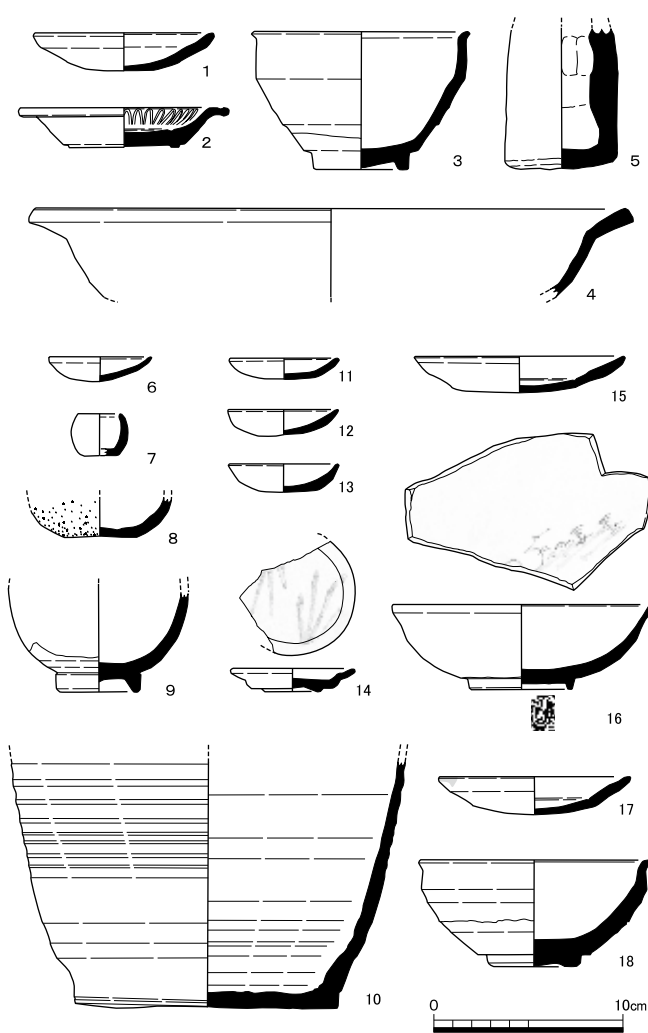


図7 出土土器実測図（1：4）

SE26出土土器（5） 5は焼塩壺である。底径5.4cm、残存高7.4cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、雲母と石英を少量含む。色調はにぶい橙色7.5YR7/4を呈する。時期は近世前半である。

SE24出土土器（6～10） 6は土師器皿Nである。口径5.4cm、器高1.3cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で雲母・石英を少量含む。色調は橙色5YR6/6を呈する。

7は土師器小壺、いわゆる「つぼつぼ」である。復元口径2.2cm、高さ2.2cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調はにぶい黄橙色10YR7/3を呈する。

8は土師器小壺、いわゆる「柚でんぼ」である。底径3.8cm、残存高2.1cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は灰白色2.5Y8/1を呈する。

9は肥前系施釉陶器の丸椀である。

底径4.2cm、残存高5.7cmを測る。内外面に鉄釉を施す。焼成は良好で、胎土は密である。色調はにぶい褐色7.5YR6/3を呈する。

10は信楽産焼締陶器の甕の底部である。底径13.8cm、残存高13.0cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は浅黄橙色10YR8/3を呈する。

時期は9が近世前半、その他は近世後半である。

SK10出土土器（11・17・18） 11は土師器皿Nである。口径5.7cm、器高1.1cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で雲母・石英を少量含む。色調はにぶい黄橙色10YR7/3を呈する。

17は土師器皿Sである。復元口径10.1cm、器高2.0cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で石英を少量含む。色調はにぶい黄橙色10YR7/3を呈する。口縁の一部には煤が付着する。

18は瀬戸・美濃系施釉陶器の天目茶椀である。復元口径12.1cm、器高5.6cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は灰白色7.5YR8/1を呈する。

時期は18が近世前半、その他は近世後半である。

SK2出土土器（12） 12は土師器皿Nである。口径5.9cm、器高1.4cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で雲母・石英を少量含む。色調は浅黄橙色7.5YR8/4を呈する。時期は近世後半である。

SK23出土土器 (13) 13は土師器皿Nである。口径5.9cm、器高1.5cmを測る。焼成は良好で、胎土は密で雲母・石英を少量含む。色調はにぶい黄橙色10YR7/3を呈する。時期は近世後半である。

SE35出土土器 (14) 14は京・信楽系施釉陶器の小皿である。復元口径6.3cm、高さ1.2cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調はにぶい黄橙色10YR7/2を呈する。時期は近世後半である。

SK28出土土器 (15・16) 15は土師器皿Sである。口径11.0cm、高さ1.9cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調はにぶい黄橙色10YR7/3を呈する。

16は肥前系施釉陶器の椀である。復元口径は13.6cm、器高4.5cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は灰白色10YR8/2を呈する。底部外面には「清水」銘がある。

時期はいずれも近世後半である。

(3) 瓦 類 (図8、図版3)

瓦類は軒丸瓦2点、軒平瓦2点が出土した。いずれも混入品である。

瓦1はSE24から出土した菊丸瓦である。単弁十二弁花文で、接合面にはヘラで沈線を施す。時期は近世前半と考えられる。

瓦2はSX1の最下層から出土した軒丸瓦である。左巻き三巴文で周囲に大型珠文を配する。また、三巴文は人為的にはつり取られている。時期は近世前半と考えられる。

瓦3はSX1から出土した軒平瓦である。簡略化した唐草文が施される。時期は近世前半と考えられる。

瓦4はSE33から出土した軒平瓦である。剣頭文が施される。時期は平安時代後期と考えられる。

(4) その他の遺物 (図9・10、図版3)

石製品が1点、土製品が2点、金属製品が2点出土した。

石製品 石1はSE26から出土した硯片である。粘板岩製で、灰白色を呈する。残存長6.3cm、幅5.9cmである。

土製品 土1・2は泥面子である。いずれも遺構検出中に出土した。土1は直径4.3cmで「眞」という文字が刻まれる。土2は直径2.9cmで扇文である。

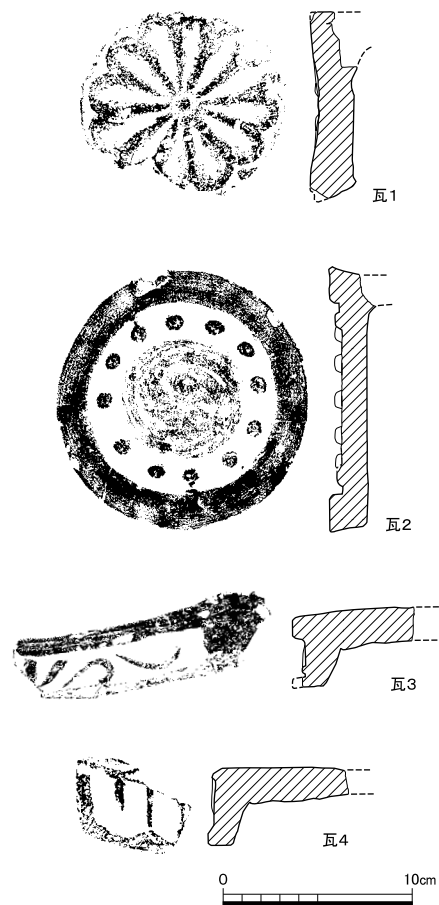


図8 出土瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

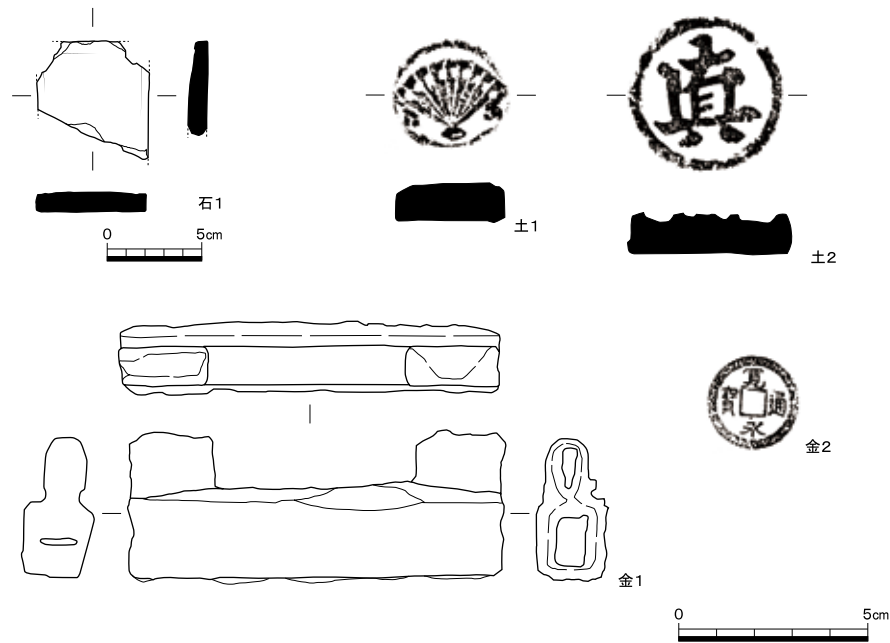


図9 出土石製品・土製品・金属製品拓影及び実測図（1：2、石1のみ1：4）

金属製品 金1はSE24から出土した鉄製海老錠の牝金具で、合田分類V群に属する¹⁾。長さ約10.0cm、最大幅2.0cm、重量105gを測る。錆化が進んでおり、施文の有無は不明である。なお、X線写真では筒部内左端にバネ受板を確認することができた。



図10 鉄製海老錠（金1）X線写真

金2はSE37から出土した「寛永通寶」である。裏面は無文。いわゆる新寛永銭で、寛文8年（1668）以降の製品とみられる。

註

- 1) 合田芳正『古代の鍵』ニューサイエンス社 1998年
 少なくとも7世紀半ばには、中国から日本へ施錠具が伝播していることが合田芳正の研究から明らかとなっている。慣例として、日本で作られた海老錠を和錠と呼ぶ場合があるが、江戸時代以降、ヨーロッパのウォード錠の影響を受けた東西折衷用の錠前を和錠と呼ぶ場合があることを併記しておく。
 山岡啓哲「錠と鍵の発達史 第5回 アジアの様式と和錠」『発明』No.6 10-13 2009年

5. まとめ

今回の調査では以下の3点を明らかにすることができた。

第1に近世の遺構面が既往調査と大きく異なる標高で検出されたことである。既往の調査から、調査区とその周辺は江戸時代には町屋、平安時代には平安宮大炊寮及び東限推定地であることが判明していた。今回の調査では、平安宮東限を示す築地の痕跡を検出することはできず、1976年調査から想定された陸の検出標高（約42.06m）や1979年に行われた大炊寮の調査の平安時代包含層の検出面¹⁾よりも低い標高で16世紀代の古瀬戸細片を含む整地層を一部確認した。この整地層は、近世初頭のものと考えられる。この時期に当地一帯は大きく削平を受け、古い時期の遺構が消滅したものと考えられる。

第2に京都所司代造成以降の土地利用を明らかにすることができた点である。近世初期の整地層や井戸の存在から、近世前半は京都所司代の造営に伴って周辺地域も整地と宅地化が行われたと考えられる。そして、数多くの土取り穴を検出したことから、近世後半には土取場となり、用途を断定することはできなかったが大規模な掘削（SX1）も行われた。その後は漆喰井戸が検出されたことから、再度整地され、宅地化されたと考えられる。

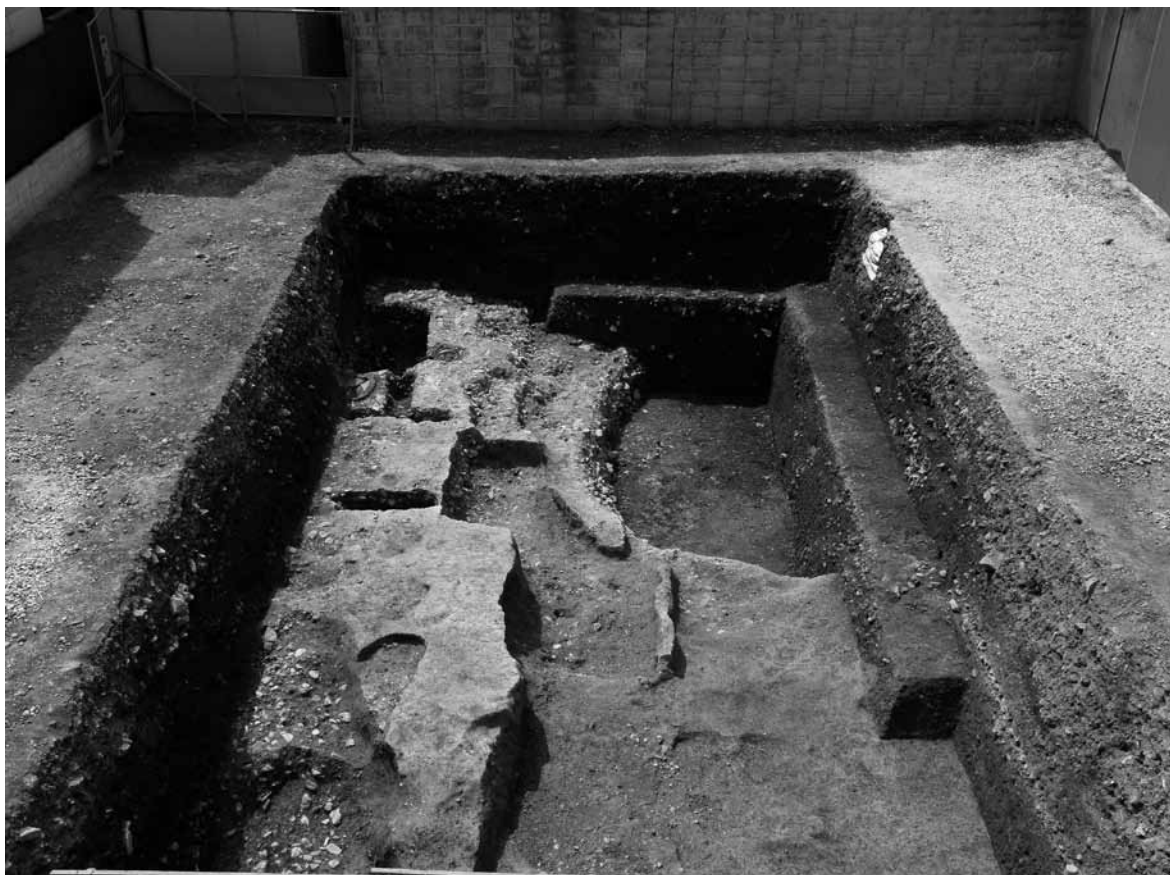
第3に近世の出土遺物に泥面子が出土している点に注目したい。元来、面子は子供が遊ぶ遊具ととらえられていたが、大名屋敷（上屋敷）などからの出土が多いことから、近年の研究では面子を「穴一」や「キズ」と呼ばれる賭博に用いられたとする研究がある²⁾。今回の出土は遺構検出中ものであるが、当地は二条城の北側に展開する京都所司代に近い場所にあたることから、こうした面からの検討も必要となろう。

上述の通り、今回の調査で平安宮東限に関する遺構を検出することはできなかったが、瓦や土師器など図化できなかった遺物も含め、平安時代の遺物が少量混じることから、中世以降の削平前には当該期の遺構が存在していたものと推測される。

註

- 1) 「平安宮大炊寮跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』京都市文化観光局 1980年
- 2) 石神裕之「近世遺跡出土の泥面子について－江戸後期の「キズ」賭博流行の周辺－」『史学』69(3/4) 503-540 2000年

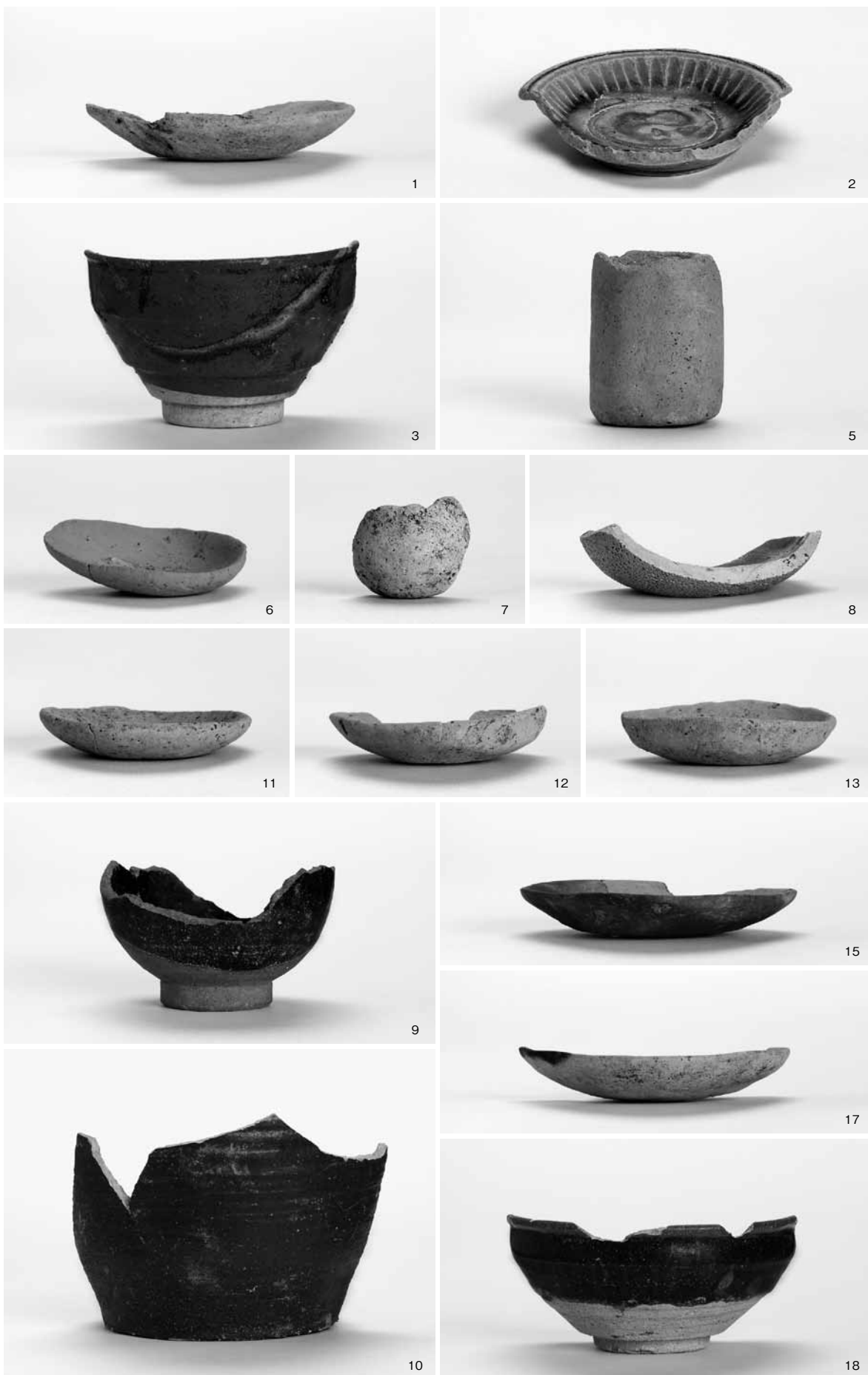
圖 版



1 調査区南半全景（北から）



2 調査区北半全景（北から）



土器類



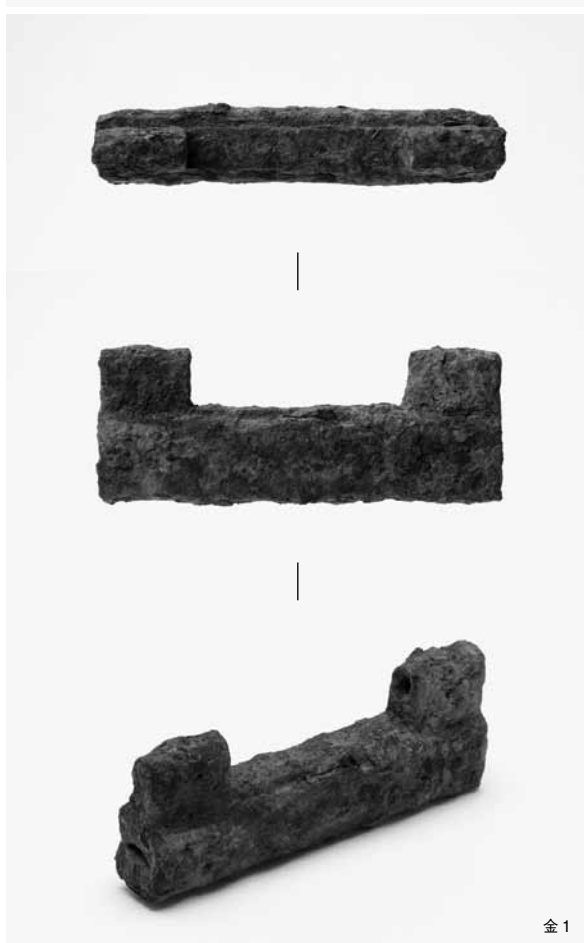
瓦1



瓦2



瓦3



金1



瓦4



石1



土1



土2



金2

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうおおいりょうあと・にじょうじょうきたいせき							
書名	平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-1							
編著者名	関広尚世							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区	26100	1	35度 01分 02秒	135度 44分 55秒	2017年3月 21日～2017 年5月2日	199.5㎡	ホテル 建設
にじょうじょうきたいせき 二条城北遺跡	まるたまちどおりくもん 丸太町通黒門 ひがしいるわらやちよう 東入藁屋町 535-2他		238					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安宮跡	宮殿跡	平安時代 ～中世			土師器、瓦		既往の調査よりも 近世の遺構検出面 が低位で確認され た。	
二条城北遺跡	集落跡	近世前半	井戸、土坑		土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、染付磁 器、焼塩壺、瓦、石製 品			
		近世後半	井戸、土取り穴、 土坑		土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、染付磁 器、瓦、土製品、金属 製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-1
平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡

発行日 2017年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961